

令和 5 年 6 月 10 日現在

機関番号：33902

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13066

研究課題名（和文）英語の現在分詞・過去分詞の実証的・理論的研究

研究課題名（英文）An empirical and theoretical study of present and past participles in English

研究代表者

杉浦 克哉（Sugiura, Katsuya）

愛知学院大学・教養部・准教授

研究者番号：40781498

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 600,000円

研究成果の概要（和文）：英語の心理動詞の現在分詞が前位修飾する名詞句の研究成果として2本の論文を発表した。論文名は「英語史におけるpleasingの名詞前位修飾構造の出現について」と「英語史におけるworryの意味変化に関するコーパス調査」である。

英語の現在分詞・過去分詞が後位修飾する名詞句の研究成果として論文を1本発表した。論文名は「非定形Ving構文における動詞移動の歴史的発達：非定形Vingと副詞の語順に焦点を当てて」である。また、タイトル「古英語のOV語順を示す縮約関係節の節構造の縮小について」を第41回日本英語学会に投稿し、現在審査中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語の心理動詞の現在分詞が前位修飾する名詞句の研究では、pleaseとworryが項に付与する主題役割と、英語史における動詞の出現時期に着目し、当該の構造がいつ、なぜ出現したかを示した。本研究は先行研究でほとんど扱われていないため、本研究結果は今後の当該分野の研究の基礎となる。英語の現在分詞・過去分詞が後位修飾する名詞句の研究では、縮約関係節を分詞構文、前置詞補部Ving構文も含めた非定形Ving構文の枠で捉え直した。そして非定形節における動詞移動の観点から分析した。この観点からの分析は先行研究にはないことから、本研究結果もまた、当該分野の今後の研究の基礎となる。

研究成果の概要（英文）：I published two papers as the results of research on noun phrases that are pre-modified by the present participle of English psychological verbs. The titles of the papers are "The Occurrence of the Noun Pre-modifying Structure of pleasing in the History of English" and "A Corpus Investigation on Semantic Change of Worry in the History of English." I presented one paper as the result of research on noun phrases post-modified by the present and past participles in English. The title of the paper is "The Historical Development of Verb Movement in Non-finite V-ing Constructions: Focusing on the Word Order of Non-finite V-ing and Adverbs." I also submitted a paper titled "On the Reduction of Clause Structure in Reduced Relative Clauses Showing OV Word Order in Old English" to the 41st Annual Meeting of the English Linguistic Society of Japan, which is currently under review.

研究分野：英語学、歴史的統語論

キーワード：心理動詞 主題役割 項 現在分詞 動詞移動 非定形節 縮約関係節 分詞構文

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

英語の現在分詞・過去分詞を実証面、理論面から分析している先行研究は比較的多いが、心理動詞の現在分詞が前位修飾する名詞句や、現在分詞・過去分詞が後位修飾する名詞句を歴史的、理論的に分析している研究はそれほど多くない。特に、心理動詞の現在分詞が前位修飾する名詞句は、応募者の先行研究を除くとほとんど研究されていないと思われる。一方、英語の現在分詞・過去分詞が後位修飾する名詞句は、生成文法理論では、名詞句を後位修飾する現在分詞・過去分詞とその補部/付加部は、関係節の一種と見なされ、関係節の分析、特に主要部名詞繰り上げ分析が応用されることが多かった(Tozawa (2014)、鈴木(2018))。しかしながら、この方針に基づく分析は、それまでの研究をChomsky (2013)等の理論的枠組みで分析し直しただけのように見えるものもあり、英語学に新たな知見をもたらすレベルの研究成果であるとは言い難い。また、実証面ではほとんど研究に進展がないように思われる。

このような背景から、本研究では(1)を本研究課題の核心をなす学術的「問い」と設定し、これに答えることを目標とする。

- (1) 英語の心理動詞の現在分詞が前位修飾する名詞句と、現在分詞・過去分詞が後位修飾する名詞句は、英語史を通じ、どのような発達過程を経て現代英語に至るか。そして、変化の過程は生成文法の枠組みでどのように説明されるか。

2. 研究の目的

本研究の目的は2つある。1つ目は、応募者が2014年以降取り組んでいる、英語の心理動詞の現在分詞が前位修飾する名詞句と、現在分詞・過去分詞が後位修飾する名詞句の研究を発展させ、(1)の問いの答えを出すことである。2つ目の目的は、当該の名詞句の歴史的変化を生成文法理論の枠組みで説明することにより、生成文法理論に経験的根拠を与えることである。

3. 研究の方法

英語の心理動詞の現在分詞が前位修飾する名詞句の研究は、please, worry, stun等の個別の心理動詞を対象を限定し、それらの現在分詞が名詞を前位修飾する事例を歴史コーパスと *Oxford English Dictionary* (OED) を用いて調査した。これは個別の心理動詞に限定した方が、研究が進展すると考えたためである。具体的には、pleaseとworryが項に付与する主題役割と、英語史におけるpleaseとworryの出現時期に着目することで、a pleasing answerやher worrying journeyのような構造の英語史における出現の動機を考察した。

現在分詞・過去分詞が後位修飾する名詞句の研究では、2つの観点からアプローチした。1つ目は、縮約関係節を分詞構文、前置詞補部Ving構文も含めた非定形Ving構文の枠で捉え直したことである。そして、非定形Ving構文における動詞と副詞の語順を、歴史コーパスとOEDを用いて調査し、動詞移動の観点から分析した。2つ目は古英語の縮約関係節の動詞と目的語の語順に着目して分析した。前者については、英語史における定形節の動詞と副詞の語順を調査したHaeberli and Ihsane (2016)の知見を非定形Ving構文に応用した。具体的には(i) 副詞が非定形Vingと3語以下の名詞目的語に先行する語順(以下Adv-Ving-0語順)と、(ii) 副詞が非定形Vingと3語以下の名詞目的語の間に介在する語順(以下Ving-Adv-0語順)を調査した。後者については、古英語の縮約関係節で目的語・動詞語順を示す用例を、歴史コーパスを用いて収集し目的語の話題性の有無を調査した。そして、目的語が統語上、どの位置を占めているかについて検討した。

4. 研究成果

英語の心理動詞の現在分詞が前位修飾する名詞句の研究成果として 2 本の論文を発表した。論文名は「英語史における pleasing の名詞前位修飾構造の出現について」(『言語の本質を共時的・通時的に探る: 大室剛志先生退職記念論文集』, pp. 212-222, 開拓社)と「英語史における worry の意味変化に関するコーパス調査」(愛知学院大学教養部紀要第 69 巻 3 号 pp. 35-42)である。

「英語史における pleasing の名詞前位修飾構造の出現について」では、現代英語の a pleasing answer のような pleasing が名詞を前位修飾する構造の英語史における出現について考察した。古英語では現在分詞の名詞前位修飾は基本的には自動詞の現在分詞に限られていたため、二項動詞である cweman, lician の現在分詞は名詞を前位修飾しなかった。Cweman, lician は現代英語の please, like に相当する語である。中英語で cweman の現在分詞が名詞を前位修飾しなかったのは、cweman の主題のほとんどが代名詞だったからである。後期中英語に cweman はフランス語からの借用語 plesen ‘please’ に取って代わられた。Please は主題に代名詞だけでなく名詞も取ったため、a pleasing answer のような名詞前位修飾が可能となった。また中英語に lyken ‘like’ の現在分詞が名詞を前位修飾する構造が現れるが、これは、lyken は主題に代名詞だけでなく名詞も取ったからである。

「英語史における worry の意味変化に関するコーパス調査」では英語史における worry の分布を調査し、意味変化に焦点を当て発達の経路を示した。Worry は 16 世紀後半までは身体的意味のみを表したが、16 世紀後半からは心理的意味を表すようになる。そして、現代英語に至るまで身体的意味を表す worry はわずかに観察されるのみである。この調査結果から worry に関する 2 つの事実が正しく説明される。第 1 に、心理的意味を表す worry の現在分詞 worrying による名詞前位修飾は 19 世紀前半に現れたが、これは心理的意味を表す worry の主語に非代名詞名詞が現れた時期が 17 世紀初期であることに起因する。第 2 に、目的語に経験者を取る動詞の前方照応の容認度の違いが説明される。具体的には worry, depress, concern, frighten は前方照応の容認度が非常に低いか、または完全に容認されないが、これらの動詞の中でも worry, depress は concern, frighten と比べると容認度が高い。これは worry がもともと身体的意味を表し現代英語でもわずかながらに身体的意味を表すために使われることに起因する。つまり現代英語の worry は concern, frighten よりも意志性、動作主性が高いゆえ状態性が低く、その結果、concern, frighten より前方照応の容認度が高くなる。

英語の現在分詞・過去分詞が後位修飾する名詞句の研究成果として論文を 1 本発表した。論文名は「非定形 Ving 構文における動詞移動の歴史的発達: 非定形 Ving と副詞の語順に焦点を当てて」(『日本英文学会第 94 回全国大会 Proceedings』, 日本英文学会)である。また、発表タイトル「古英語の OV 語順を示す縮約関係節の節構造の縮小について」を第 41 回日本英語学会に投稿し、現在審査中である。

「非定形 Ving 構文における動詞移動の歴史的発達: 非定形 Ving と副詞の語順に焦点を当てて」では、歴史コーパスを用いて英語史における非定形 Ving と副詞の語順を調査した。調査から、15 世紀中ごろから 18 世紀初期まで、独立分詞構文、現在分詞縮約関係節、前置詞補部 Ving 構文、自由付加詞構文では動詞移動が生産的だったと主張した。特に、現在分詞縮約関係節の統語構造として (2)、(3) を提案した。副詞が動詞に先行する Adv-Ving-0 語順は、16 世紀から現代英語まで動詞が元位置に留まる (2) の統語構造であると考えられる。そして、動詞が副詞に先行する Ving-Adv-0 語順構文は、15 世紀前半から現代英語まで動詞が Asp を経由して T へ移動する (3b) の統語構

造であると考えられる。現代英語ではVing-Adv-O語順を示す当該の非定形Ving構文は衰退しているため、基本的には話者は(2)のAspP構造を持つ。しかしながら、現代英語でも(4)のような現在分詞縮約関係節の例においてVing-Adv-O語順が見られるため、(3b)のTP構造を許す話者が存在すると主張する。(4)はCollins WordBanks Onlineからの例である。

- (2) [AspP [Asp' Asp_[uV] [vP adv [vP V-V_[uAsp] [VP t_v O]]]] (Adv-Ving-O 語順)
- (3) a. [TP [T' T_[uV][EPP] [AspP [Asp' adv [Asp' Asp_[uV][EPP]] [vP V-V_[uAsp][uT] [VP t_v O]]]]]]
- b. [TP [T' V-V_[EPP][uT] [AspP [Asp' adv [Asp' t_{v-v}] [vP t_{v-v} [VP t_v O]]]]]] (Ving-Adv-O 語順)
- (4) the extent of the drug dealings increasing dramatically the prostitution was increasing dramatically ... (doc#9012)

本研究結果から、現代英語の現在分詞縮約関係節がTPであるかAspPであるかの問題が解決されると思われる。(cf. Tozawa (2014), Sugiura (2019)) 現代英語の縮約関係節は基本的にはAspPであるが、TPの構造を許す話者も存在すると考えることで2つの構造が認められるからである。

第41回日本英語学会に投稿した「古英語のOV語順を示す縮約関係節の節構造の縮小について」では次の3点を主張している。(i) 古英語で名詞を後位修飾する現在分詞は形容詞ではなく動詞である。(ii) OV語順を示す縮約関係節の現在分詞の目的語は談話上、既知であり、話題である。したがって、目的語はvPの上位に位置するTopP指定部に移動する。(iii) 古英語でOV語順を示した縮約関係節が中英語に消失したことは、TopPからvPへの縮小という点で田中 (2015)、縄田 (2023)等が主張する節構造の縮小の一例である。

また、関連するテーマとして、英語史においてデフォルト格が主格で具現される現象について調査し、成果として論文を1本発表した。論文名は「英語史におけるデフォルト格としての主格について」(『近代英語研究』第39号, 近代英語協会発行)である。採択が決定し2023年6月に発行される予定である。

この論文では、左方転移された代名詞と独立分詞構文の主格主語について論じた。具体的には歴史コーパスを用いて、左方転移された代名詞と主格主語独立分詞構文の用例を収集し、構造格としての主格が付与されない環境で主格代名詞が具現する例を調査した。Chomsky (2007, 2008)の極小主義の枠組みでは、C-T 構造形のもとで構造格としての主格付与が保証される。しかしながら、左方転移された主格代名詞と古英語の独立分詞構文の主格主語は C-T 構造形の下にない故、構造格としての主格は付与されない。このため、Schütze (2001)の述べるデフォルト格の定義に従い、当該の構造の主格代名詞にはデフォルト格が付与されていること、そしてそれらは主格として具現することから、デフォルト格は主格であると結論付けた。特に、古英語に見られるデフォルト格としての主格は、同じゲルマン語に属するドイツ語の影響が残ったためであると主張した。デフォルト格としての主格は後期近代英語にもわずかに観察される。

現代英語ではデフォルト格として対格が標示されるとする考えは広く受け入れられているように思われる。そのような研究は通言語的なものが多いが、一方で、通時的研究、とりわけ英語史に焦点を当てたデフォルト格の研究は筆者の知る限り無い。そのため、古英語ではドイツ語等と同じように主格がデフォルト格として具現し、20世紀にもわずかにその用法が残ったとする本稿の主張は、この分野の今後の研究に一石を投じられると思われる。

参考文献

- Chomsky, Noam (2007) "Approaching UG from below," *Interface + Recursion = Language?: Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, ed. by

- Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner, 1-29, Mouton de Gruyter, New York.
- Chomsky, Noam (2008) “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory*, ed. by, Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection.” *Lingua* 130, 33-49.
- Haerberli, Eric and Tabera Ihsane (2016) “Revisiting the Loss of Verb Movement in the History of English,” *Natural Language Linguistic Theory* 34, 497-542.
- 縄田 裕幸 (2023) 「英語関係節の結合と縮約再訪」 『関西外国語大学 第8回 IRI 言語・文化コロキウム 「極小主義と統語変化」』, 2023年1月28日, 関西外国語大学.
- Schütze, Carson T. (2001) “On the Nature of Default Case,” *Syntax* 4: 3, 205-238.
- Sugiura, Katsuya (2019) “A Generative Analysis of Reduced Relative Clauses,” *JELS* 36, 288-294.
- 鈴木達也 (2018) 「英語縮約関係節の構造について」 『中部英文学』 37号. 21-29.
- 田中 智之 (2015) 「古英語における目的語移動と左周縁部」 『名古屋大学文学部研究論集 (文学)』 61, 71-88.
- Tozawa, Takahiro (2014) “The Head Raising Analysis of Reduced Relative Clauses in English,” *JELS* 31, 221-227.

辞書

Oxford English Dictionary (OED)

コーパス

Collins WordBanks Online

- Kroch, Anthony, Beatrice Santorini, and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME), University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Kroch, Anthony, Beatrice Santorini, and Ariel Diertani (2016) *The Penn Parsed Corpus of Modern British English*, Second Edition (PPCMBE2), University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Kroch, Anthony and Ann Taylor (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English* (PPCME2), Second Edition, University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk, and Frank Beths (2003) *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose* (YCOE), University of York, York.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 杉浦克哉	4. 巻 -
2. 論文標題 英語史におけるpleasingの名詞前位修飾構造の出現について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大室剛志先生退職記念論文集	6. 最初と最後の頁 212-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉浦克哉	4. 巻 第69巻3号
2. 論文標題 英語史におけるworryの意味変化に関するコーパス調査	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛知学院大学教養部紀要	6. 最初と最後の頁 35-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉浦克哉	4. 巻 -
2. 論文標題 英語史におけるpleasingの名詞前位修飾構造の出現について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大室剛志先生退職記念論文集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 杉浦克哉
2. 発表標題 目的語経験者動詞Stun, Worryの出現について
3. 学会等名 第7回史的英語学研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------